
古代アメリカ学会会報

第38号



ペルー中央海岸スーペ谷、アスペロ遺跡

©荘司一步

目次

| | | | |
|----------------------|----|-------------|----|
| ◆特集：フィールド調査体験記の「その後」 | 1 | ◆新入会員紹介 | 20 |
| ◆第5回東日本部会研究懇談会の報告 | 15 | ◆事務局からのお知らせ | 20 |
| ◆公開フォーラム・国際シンポジウムの報告 | 16 | ◆編集後記 | 23 |

2015年7月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

特集：フィールド調査体験記の「その後」

二年前に本会報で特集をした「フィールド調査体験記」を覚えていらっしゃるでしょうか。その際にご寄稿いただいた若い会員の方々の中には、新たなフィールドでご活躍の方がいる一方、研究を継続・深化されている方もいらっしゃいます。本特集では、研究を継続されている方々を対象に、「フィールド調査体験のその後」について再度ご寄稿をお願いしました。現在の問題意識や研究動向の紹介を交えながら、二年前のフィールド体験がどのように生かされているのかについても触れていただきました。本特集を通し次代を担う研究者の卵たちの成長を感じ取っていただければと思います。

●先史アマゾン、モホス平原における社会動態 — 生態環境の改変と複雑社会の視点から —

井上恭平（総合研究大学院大学文化科学研究科
博士後期課程 2年）

前回の掲載から2年、当時修士課程だった筆者は現在博士課程に進学し研究を続けている。修士課程以来の「社会はなぜ、どのように複雑化していくのか？」という関心は、博士課程に進学した現在も研究を行う上で筆者の問題意識の根底であり続けており、この人類学的テーマに取り組むべく、南米先史社会の研究を続けている。

しかし、上記の問題意識を継続させながらも、博士課程進学を期に筆者の研究は大きな転換を迎えた。修士課程までは研究対象を主に中央アンデス地帯東斜面に据えてきたが、博士課程に入り、アマゾン熱帯低地であるモホス平原へと変更したのである。もともと筆者は、学部、修士課程を通じ、従来から研究が少なく、未だその実態に不明な部分が多い先史アマゾン社会に大きな関心があった。しかし、先行研究が圧倒的に不足しており、資料の乏しいアマゾンについて、体系的な研究として取り組むためのデータや知識を当時の筆者は持ち合わせておらず、また新たな資料を収集する手段も限られていた。そこで、まずはアンデス地帯とアマゾン低地の境界に近く、熱帯低地との強い関係を示していた東斜面、ワヤガ川上流域の形成期を対象とし、アンデスとアマゾンの関係性に着目した研究を行った。同時にこの研究を通じ、社会変化や複雑化に関する理論的枠組み、方法論を学んだ。そして博士課程に進学した現在、かねてより関心のあったアマゾンでの研究に着手することにしたのである。

まだ着手したばかりではあるが、研究対象地をアンデスからアマゾンに変えたことで、同じ「社会の複雑化」という研究テーマであっても、キーとな

る視点が大きく異なってくるのがわかった。アンデス地帯形成期では、公共建造物である神殿が社会複雑化を論じる上で重要な役割を担っている。一方アマゾンでは、先史社会による「生態環境の改変」に着目した研究が近年着目を浴びつつある。アマゾン先史社会は、1990年代以前に考えられていたような、小規模で環境に制限された社会ではなく、厳しい環境である熱帯低地を景観規模で改変し、独自の複雑性を持って展開していたという議論がなされているのである。つまり、アマゾンで社会複雑化について研究する際には、生態環境の人為的改変とそれに伴う社会、文化との関係を捉えていく必要がある。



写真1 飛行機から撮影した2007年雨季のモホス平原
(Ricardo Botega氏提供)

アマゾンというと、アマゾン川流域の鬱蒼としたジャングルのイメージを持つ人が多いと思う。しかし、実際のアマゾンはサバンナに分類される地域が少なくない。筆者が研究対象とするモホス平原もボリビア共和国北東部、ベニ県に位置するサバンナ地帯である。乾季と雨季に分かれるサバンナでは、雨季になると大量の降雨と川の増水による氾濫原

が出現し、広大な面積が冠水する（写真1参照）。元来シルト質の土壌で地力は低い上、雨季には冠水するため、一見すると生産性が低く、人類が大きな社会を築くために適した環境とは言い難いように見える。しかしこの地域では、非常に広い範囲で耕作地と推定される遺構（雨季の冠水を防ぐため土を盛り高くした耕作地、**raised field** と呼ばれる）が確認されており、加えてこれら耕作地に関連するマウンド状の居住地とこのマウンド間を結ぶ道路（これらも盛り土により高く造られる）など、多様な形態と機能を持つと考えられる土木工事の痕跡がサバンナの各地に残されている。これらの土木工事跡の広がり、航空写真や衛星写真でも確認することができ、まさに景観レベルでの生態改変であると言える（写真2、3）。こうした土木工事の起源や展開などについては現在のところ不明である。しかし、これらが景観を変えてしまうような大規模なものである以上、かなりの規模の社会がかつて存在し、おそらく農耕定住社会を展開していたことが想定されている。



写真2 耕作地跡（raised field）と居住地の可能性が指摘されているマウンド

© 2008 Google Earth, Image date © 2008 Digital Globe

筆者の研究の視点は、モホス平原の先史社会が、これら土木工事に代表されるような生態改変を行う中で、どのように複雑化していったのかという視点から、人類と生態環境の関係のダイナミズムを明らかにすることである。これは、筆者の社会複雑化という関心だけに留まらず、人間と自然の関係を、アマゾニアの先史社会から再考するという点で、現代社会にも大きな意義を持つと考えている。

以上のような新たな視点と対象で研究を始めたのではあるが、抱える問題は多い。元来アマゾニア

低地の研究自体に蓄積が少なく、おまけに石造建造物が皆無である熱帯低地では発掘調査で得られる資料も限定される。実際、考古学研究の基本である土器編年を取ってみても、発掘調査による実証的な土器編年があるのは近年の調査による数遺跡でしか編まれていないのがモホス平原の現状である。また、日本人による先史アマゾニア研究の事例は非常に稀で、現在は皆無と言ってもよい。



写真3 飛行機から撮影した耕作地跡（raised field）
（Ricard Botega 氏提供）

前途多難ではあるが、こうした現状の中、今の自分にできることを一つ一つ着実にやり、少しでも先史アマゾニア研究の重要性を訴えていきたいと考えている。

●中間領域（中米南部地域）における祭祀メタテ研究—ニカラグア、コスタリカでのフィールド調査を通じて—

植村まどか（京都外国語大学大学院外国語学研究所 博士後期課程1年）

はじめに

今からちょうど2年前、まだ修士課程に進学して間もない2013年に本会報の『フィールド調査体験記』へ寄稿した。コスタリカでの発掘調査や博物館収蔵品調査、ニカラグアでの発掘調査などを経て、2015年3月、先スペイン期の中間領域における祭祀メタテの機能に関する考察として修士論文を提出し、修士課程を修了した。現在は、博士課程に在籍し、祭祀メタテから中間領域の先スペイン期社会と地域間交流についての研究を行っている。本稿では、祭祀メタテ研究に至る経緯や、フィールド調査

の概要、また今後の博士課程での研究の展望を述べたい。

祭祀メタテとの出会い

メタテとは、メソアメリカ地域にみられる食物をすり潰す石皿のことで、とりわけマヤ地域では現在も利用されている日用品である。筆者が祭祀メタテという存在を知ったのは、2012年3月にニカラグアの国立博物館で、「Sala de los metates」というメタテだけが陳列された展示室を訪れた時のことであった。当時は、南博史教授（京都外国語大学国際文化資料館館長）と予備調査のためニカラグアを訪れており、学部卒業後に同大学国際文化資料館で非常勤学芸員として勤務しながら、今後の研究テーマを漠然と模索している時期でもあった。初めて踏むニカラグアの地で目の当たりにした数々の奇抜なメタテにすっかり心を奪われてしまったのが始まりである。

同年8月にコスタリカのサンホセにある国立博物館、中央銀行博物館（黄金博物館）、そしてヒスイ博物館を訪れたが、どこの博物館でも祭祀メタテのコレクションには一定のスペースが設けられ、中央銀行博物館ではジャガーをモチーフとした祭祀メタテの特別展を開催していた。

祭祀メタテを修士課程での研究テーマにしたいと考えていた筆者は、訪れた各博物館の所属考古学者に祭祀メタテ研究の現状や、専門とする研究者などを尋ねたところ、どの研究者も揃って「博物館に收藏されている祭祀メタテは寄贈品であったためにコンテクストを持たないので、美術品としての価値は高いが考古学的手法を用いた研究はされたことがない」というのだ。一方で、展示室には発掘調査時に撮影されたと思われる、祭祀メタテが墓塚から出土している様子がパネルで展示されている。メタテの出土例があるのに、本当に考古学的手法は取れないのだろうか。こんなに面白そうな石製品が国内各地から集められているのに、何とか研究できないものか。このような疑問が次々と浮かび、研究方法や分析方法などの試行錯誤を繰り返しながら、祭祀メタテの摩耗痕分析を行うこととなった。

コスタリカでのフィールド調査

フィールド調査内容は、主にサンホセ市内にある博物館での収藏品調査、コスタリカ国立博物館での発掘調査報告書の収集、博物館所属考古学者やコス

タリカ国立大学教員などに祭祀メタテに関する聞き取りなどを行った。

調査を始めるにあたり、サンホセ市内の各博物館を調査協力の依頼に訪ねた際には、館長や担当となる考古学者らに迎えられ、協力依頼は快諾されたものの、祭祀メタテを扱った研究はコスタリカでも類例が無かったためか、懐疑的な意見や助言が多かったように思う。国立博物館でも同じような状況ではあったが、どの博物館の考古学者も、本調査には全面的に協力してくれたし、自身の持つ限りのメタテに関する情報や資料、関連文献、祭祀メタテを発掘した調査時の記憶などを惜しみなく提供してくれた。彼らの厚い協力があったからこそ、修士での研究を成し遂げることが出来たのだと思う。

また今回のコスタリカの調査を経て、コスタリカの黄金博物館からコロンビアの黄金博物館へ、コスタリカ国立博物館から他国の研究者への紹介を受けるなど、研究フィールドはコスタリカから中間領域へと広がっている。今後も中間領域をフィールドとして調査を行う上で、最前線で研究を行っている研究者とのネットワークが構築できた点も今後につながる良い結果であった。

ニカラグアでの発掘調査

一方ニカラグアでは、冒頭で述べた2012年の予備調査以降、京都外国語大学国際文化資料館が主体となりニカラグア国立自治大学（以下、UNAN）とマタガルパ県に拠点を有するNGOのANIDES（ニカラグア開発支援協会）と共同で行う「プロジェクト・マティグアス」を展開している。マタガルパ県マティグアス郡ティエラ・ブランカ地区をフィールドとし、考古学と博物館学を仲介者とした地域研究を行うものである。調査概要については本プロジェクト責任者である南博史教授からの報告¹が挙げられているためここでは割愛する。筆者は本プロジェクトの立ち上げ時から携わっており、現在は調査主任という立場でニカラグア文化庁への調査申請や現地調査のコーディネート、スペイン語や日本語での調査報告書の作成などを行っている。

さて、本プロジェクトは筆者の祭祀メタテ研究と同時期に開始されたものだが、思いがけず祭祀メタテに遭遇する機会を得た。ニカラグアでの調査は、主にラスベガス遺跡の発掘調査、遺跡周辺の踏査、測量、表面採集、遺物分析、マティグアス現地説明会などが主な調査内容となっているが、特に遺跡周

辺の踏査については、現地説明会などを通じて地域住民から遺跡の情報が寄せられた際に実施している。

2014年3月、地域住民からの情報を元にラスベガス遺跡から北西約3kmに位置する私有地（後にMATI-21と名付けられる）まで踏査に赴いた。その私有地には、盗掘と思われる深い穴や、目測で確認できる約30余りのマウンド群、地表面にはいたる所に土器片が散らばっており、調査中のラスベガス遺跡からも比較的近いことから興味深い遺跡のひとつとして位置づけられていた。各自が踏査を進める中、遺跡まで案内してくれた地域住民のひとりが、たまたま地表に転がる角ばった石片を見つけ、よくよく観察すると何やら彫刻が施されていたため遺物と認知したようである。最初に発見したのが筆者ではなかったことは悔やまれるが、それでもこの地で表面採集によって祭祀メタテが確認できたことは、中間領域における祭祀メタテの分布を検討する上で大変貴重かつ有力な資料となった(写真1)。現在この地点は、筆者が実際に確認した祭祀メタテの最北端の地点と位置付けている。

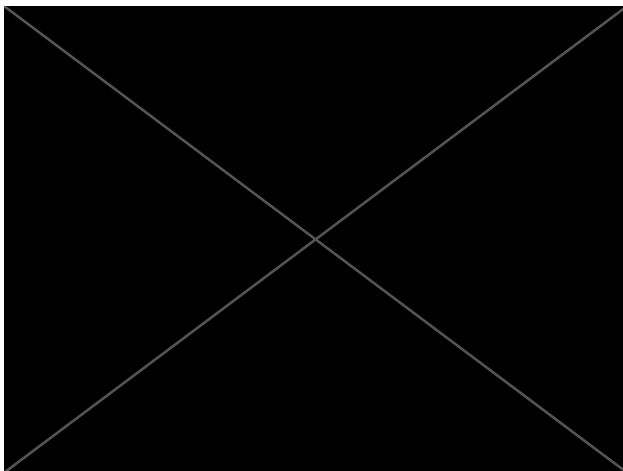


写真1 ANIDES会長のグロリア・オールドニェス氏と
祭祀メタテ発見に喜ぶ筆者 ©南博史

残された課題と今後の展望

修士課程での研究の目的は、祭祀メタテの使用面に残る摩耗痕分析から、祭祀メタテの機能を明らかにすることであった。結論から言えば、分析から機能を明らかにすることはできず、自身の仮説を検証するに留まった。摩耗の分析と、コスタリカにおける祭祀メタテの各型式の分布、そして脚付きの台座に腰掛けるミニチュアの土製品から、祭祀メタテのイスとしての機能を指摘したが、それも証明するに

は至らなかった²。

今後は修士課程で証明しきれなかった祭祀メタテの機能を明らかにし、そこから中間領域全土を対象に祭祀メタテの出土例をあたってコンテクストを収集して、共伴遺物などから祭祀メタテの時期の特定を試みたい。そして、最終的には祭祀メタテから、中間領域の先スペイン期社会の階層化と、古代メソアメリカと古代アンデスの両文明との地域間交流を明らかにしたいと考えている。

最後に、ニカラグアおよびコスタリカにおけるフィールド調査ならびに考古学調査方法などを親身にご指導いただいた南博史教授には、この場を借りて心より御礼を申し上げる。

注)

- 1 南博史(2013)「中間領域ニカラグアにおける考古学の現状と課題—ニカラグア・マタガルパ県ティエラ・ブランカ遺跡の予備調査を通して—」、『MUC 京都外国語大学国際文化資料館紀要』、京都外国語大学国際文化資料館、第9号、pp.33-45。南博史(2014)「ニカラグア・マタガルパ県マティグアスにおける地域研究の開始—考古学と博物館学による地域課題解決にむけて—」、『古代アメリカ学会会報』、古代アメリカ学会、第35号、pp.2-4。など。
- 2 古代アメリカ学会第19回研究大会(於:名古屋大学)において報告している。

●生業/儀礼、公共空間/居住空間の考古学へ

荘司一歩(総合研究大学院大学文化科学研究科
博士後期課程2年)

2年前、神殿での活動か、生業活動のどちらか一方ではない、「遺跡の完全性」を意識した調査・研究を志したいと、この会報に書いた。当時の問題意識として、神殿社会を支えた生業が背景に追いやられおり、偏りがあることを感じていた。しかし、その後、修士論文の執筆を通して少しずつ問題意識は変化してきた。そうした変化と試行錯誤しつつある研究の方向性について簡単に紹介したい。

考古学における生業研究はすでに長い歴史を有している。1960年代頃の経済研究は、生業に焦点を当て、環境・生業・生産力を単純に結びつけた環境決定論的な議論が行われてきた。しかし、1980年代以降、文化独自の理論に重要性を置く学問的潮流の中で注目を集めたのは、奢侈品の獲得や余剰の

コントロールなど、ポリティカルエコノミーと呼ばれる経済活動の政治社会的側面であった。

こうした展開は経済研究の可能性を大きく広げたと同時に、生業はあまりに基礎的な、経済の背景に位置づけられ、それ自体の関心は薄れていく結果となった。一方の文化人類学では生業実践と文化や世界観を結び付ける研究など生業自体の社会的側面への着目も盛んであるが、考古学においては依然として欠如したままである。

修士論文では、各遺跡から報告される動植物遺存体データの集成をもとに、中央アンデス地帯における生業戦略の変遷とその背景について考察した。分析と考察の結果、中央アンデスの石期から形成期にかけて、網羅的な資源利用を維持しながらも、移動から交換へ、それを入手する手段が変化する状況が明らかになった。

このような変化の背景には、生態環境の変動という現象が深く関わっている。しかし一方で、生業における交換が活発化する現象は、神殿の建築活動や儀礼活動、その際に求心力を高める威信財の獲得など、形成期を代表する社会全体の動きや物資の移動が活発になる状況と同調している。つまり、生業とは生態環境の側面と社会文化的側面を併せ持った複合的な現象だと結論付けられた。

修士課程の研究を終えると同時に、新たな問題意識が芽生えてきた。それは、生業と儀礼が研究史上分断されてきたことである。

生業と儀礼は、考古学や文化人類学を中心に多くの研究蓄積がなされてきており、すでに馴染み深いテーマになっている。しかし、考古学において、これらのテーマはそれぞれ異なる文脈の中で分断されて研究されてきた傾向にある。その理由は、考古学における1960年代以来の生業研究は、自家消費を基礎とする経済的な側面に偏ってきたためである。それゆえ、考古学は居住地を生業に、公共建造物を儀礼、あるいは政治に結び付け、両者を異なる文脈に分離させてきた。修士課程の研究も生業という経済活動に社会的側面があると指摘しただけで、儀礼活動はその枠組みの外にもれていたといえる。

しかし、はたして実際の生業活動と儀礼活動は、明瞭に分別して解釈することが可能であろうか。例えば、日本の水稲耕作に関わる農耕儀礼を考えてみてもよくわかる。実際の水稲耕作に先立って、形式的に田を耕し、餅などを備えて豊穰を祈願する「鋤入れ」に始まり、播種や田植え、収穫などの各過程

で定められた儀礼を行うなど、生業と密接な儀礼活動が多く存在する。こうした儀礼活動は単独では意味をなさず、並行して行われる農耕活動に沿って、適切なタイミングで組み合わせられなければならない。つまり、両者は相互依存的に実践されることで、世界観や集団のアイデンティティを生業活動と関連させながら織り上げているのである。すなわち、生業活動とは、単なる自給的な経済的活動だけではなく、周囲の環境や他者、モノとの社会関係を実現させるような、社会的活動でもあるといえる。

さらに、もうひとつの問題は、形成期の調査と研究が、公共建造物に集中してきたことである。形成期の公共建造物では数百年にわたる諸活動が繰り返されているため、その研究は長期的な人間活動と社会変化の過程を明らかにしてきた。一方で、住居址などの調査は不足しているのが現状である。これは、上述のような自家消費の生業と儀礼をわけ、住居と公共建造物に当てはめてきたことが一因となって引き起こされた状況といえる。

しかし儀礼活動は、公共建造物で行われる「お祭り」のようなものだけでなく、世帯単位や個人単位で行われる場合がある。例えば、日本においても年に何回か神社などに赴いて、共同で儀礼活動を行う一方、各家の中に設置された神棚でも日々儀礼活動を行うのが習わしであった。このように、儀礼活動とは、空間を問わず、様々な局面で「願掛け」や「風習」などとして行われるものである。つまり、それは生業や各種の諸実践と密に絡み合いながら、様々な空間を統合的に織りなす活動といえる。



セロ・ベントロン遺跡における網にかかったシカのレリーフ
(筆者撮影)

このような問題意識により、公共空間と居住空間、

生業と儀礼の実践活動を統合的に捉える視座から、考古学的生業研究の再構築を試み始めている。具体的には、儀礼と生業の統合的な関係に着目し、公共と居住の両空間で行われる儀礼的実践の総体から世界観が共有され、集団が形成されやるメカニズムに迫ろうとするものである。

修士課程の研究では、生業を一義的に経済活動とみなす既存の枠組みからその社会的側面を明らかにした。しかし、以上のことを踏まえ、その枠組み自体を問い直し、生業の多義性や社会性をより立体的に論じる必要がある。文化人類学における近年の生業研究において、生業は、社会や文化、アイデンティティや世界観と結びついていることがわかっている。つまり、生業は生きるための物質的な基礎を作り出す社会経済的な行為を意味する。このような研究において、生業は単なる経済活動ではなく、豊作を祈願した農耕儀礼や、狩猟で獲得した獲物の解体や供儀に関する慣習のように、それに関連した儀礼活動も含まれているのである。

以上のような研究を達成するためには、居住空間と公共空間を備えた集落遺跡を発掘調査し、基礎データの獲得と両空間の実践活動を復元しなければならない。そのために、とくに近年調査事例が蓄積しつつある、太平洋沿岸に位置する集落遺跡の発掘調査をすべく、現在踏査をしながら発掘対象となる遺跡を選定している。アンデス形成期における漁撈に従事した集団を対象に、世界観共有と変化のメカニズムを解明することで、考古学における生業研究を経済的な側面と社会的な側面から再構築し、集団形成や社会変化に迫るための新たな枠組み作りに貢献したい。

●琥珀産地シモホベルでの滞在—石と人との関わりを探る

千葉裕太（愛知県立大学大学院国際文化研究科
博士後期課程 2年）

二足歩行を始めた人類は、両手の自由から様々なモノを用いるようになった。初めは樹木や鉱物・皮革を、次第にそれらを組み合わせ、あるいは変質させ、現代の私たちは複雑な物質文化の中に生きている。

いわゆる石器時代、広く世界中で利用された黒く美しい石がある。黒曜石だ。私はこれまでこの石を、メキシコ中央高原に地域を絞り研究してきた。黒曜

石の利用法は実に多彩である。ナイフ、槍先、石刃などの道具はもちろん、副葬品や種々の儀礼の舞台装置、人形、装飾品、容器など、人類の歴史の中で大きな役割を担ってきた。現代では、手工芸品、活水装置、建築資材など、石のもつ特性を活かした各種の商品が存在している。

学部時代、この黒曜石がメキシコ中央高原においてどこでいかに採掘・加工され、都市内での生活のために輸入されてきたのか研究してきた。黒曜石の考古学調査は多数あるが、都市内部からの出土品が研究の中心である。私は岩脈と都市間の、人と石との繋がりを知りたかった。同時に、黒曜石が利器の主原料の地位を失った後にはどのような形で人との繋がりが続けられたかにも興味があった。黒曜石原産地を訪れての観察や手工芸品工房での聞き取りなど民族学調査を行い、学位論文を執筆した。

黒曜石の興味深い利用法の一つに、医術利用がある。医術利用を修士時代のテーマとし、植民地初期のスペイン人による史料を基に学位論文を執筆した。鉱物性薬は植物や動物性の薬と異なり、組成成分に薬効を見出す現代科学では説明のつかないものが多い。例えば黒曜石の粉を丸薬にして内服した例を *Sahagún* は記しているが、自然ガラスである黒曜石が体内に入るとはむしろ危険といえる。それでも薬に使われたのは、石そのものに何らかの治癒性が見出されたことによる。私は一部のアステカの神々の治癒神としての性質が、色の象徴性を媒介とすることで石自体にその治癒性が見出され、医術に用いられたと結論づけた。

同様に、人類の歴史の中で医術に用いられてきた石がある。琥珀である。琥珀は樹液が長い年月をかけて化石化したもので、厳密には鉱物ではない。有機物で静電気を発生させやすく、燃やせば炎と煙と共に独特の香りを放つ。メソアメリカ各地で、コパールと呼ばれる香が儀式で使用されていたことは知られているが、コパールもまた固化した樹液であり、両者の使用例は比較すべき事項である。琥珀は主に装飾品に加工されたことが考古学調査からわかっている。一方で、現代でも鼻の通りを良くする薬や子どもを守る護符としても使われている。興味深いのは、琥珀の医術利用は世界各地に例があり、共通点が多いことである。人が琥珀に価値を見出したその根幹には、認知機能の変化、世界観、経験則など、いかなる概念が存在するのか、黒曜石の場合との差異はどのようなものかなどが、私の現在の研究テー

マである。

黒曜石研究から琥珀研究への転向について、諸先輩方にはしばしば驚かれる。中央高原の黒曜石からマヤ地域の琥珀への転向は同じメキシコでも大きな違いがあることは承知の上である。しかし私としては、あまり地域や石の種類にこだわりたくないのが本音である。できることなら、目は世界に向けたい。



メキシコ・シモホベル産琥珀(黄色琥珀) (筆者撮影)

昨年8月、岩手県にある久慈琥珀博物館を訪れた。私の地元であるため何度も行ったことはあるが、研究者の視点で行くと見方が大きく変わるものである。琥珀そのものに関する説明だけでなく、医術利用や琥珀に関する寓話、各地の琥珀、内含物の学術的可能性など、決して広くはないスペースの中で非常に内容の濃い展示がなされている。琥珀利用の多様性に驚かされた次第で、琥珀もまた人と石との関わり方を研究する上で非常に有用だと感じた。琥珀に関しては、日本、バルト海、そしてメキシコと広

く比較しながら見たいと思っている。

メキシコを切り離す予定はない。世界的にみて比較的遅くまで石器段階にあったメキシコは、それだけ石が社会に対して影響力を保有していると考えている。今年4月、チアパス州にある琥珀の原産地を訪れた。シモホベルというその街の周囲には30箇所近い坑道が拓かれ、住人の多くが何らかの形で琥珀に関わっている。男性は鉱夫だけでなく、坑道の所有者として賃料を得る者、琥珀の仲買をして生計を立てている者、工房でアクセサリーなどを作り売っている者などがいる。女性もまた、坑道の外の廃石を割り内部の琥珀を探す者、坑道の所有者、夫が採掘した琥珀を自身で磨きアクセサリーにして売る者などがいる。女性たちは中央広場にテントを立て、一日中売り子をしていることが多い。鉱夫の男性たちは昼間坑道にいるが、仲買人たちは朝から中央広場にいる。子どもたちは朝から親を手伝い売り子をしている。土日は近隣の村からもまた、各村で採った琥珀を仲買人たちに売りに来る。中央広場は毎日活気に溢れていた。



中央広場にて。紫外線ライトで査定する (筆者撮影)

今回の調査は1週間だけの短い期間であった。毎朝中央広場に行き、仲良くなった鉱夫たちに坑道に連れて行ってもらうとき以外は、夜遅くまで中央広場でおしゃべりをしてきた。黒曜石産地と異なり皆商魂逞しかったため、琥珀を買えば客としての対応しかされなくなると思い、あえて何も買わなかった。琥珀の産地に来た東洋人が、勉強しに來ただけと言って何も買わず、何をすることもなく広場でおしゃべりしているのだからだいぶ奇異の目で見られたが、幸いにも住民の興味を引くことには成功したらしい。仲良くなるにつれてこの街での仕事のことや生

活のことを話してくれ、少しずつ人と琥珀との関わり方が見えてきた。調査前に読んだ先行研究に記された内容と比べても、現在まで続く慣習や近年失われつつある伝統など、文化は常に流動的であることを身を以て学んだ次第である。

人類は「自然」を「物質」として切り取り、自らの「文化」に組み込んできた。長い歴史の中で「適材適所」の言葉のとおり、明確な意図をもって取捨選択した物質を、生活の中に適用させ続けた結果、今日の我々がいる。そのような物質文化の中でも、特に人と石の関わりについて、今後も研究を行う。まずは黒曜石と琥珀から、環境から人間の認知の変化まで踏まえて、研究を続けていきたい。



坑道内の様子（筆者撮影）

●テチナンティトラ壁画「羽毛の生えたヘビと花咲く木」の図像解釈をする日々

丹羽悦子（愛知県立大学大学院国際文化研究科
博士前期課程2年）

メキシコの世界遺産であるテオティワカンには、テチナンティトラと呼ばれる住居址がある。筆者の研究テーマは、このテチナンティトラで発見された壁画の図像解釈だ。中でも「羽毛の生えたヘビと花咲く木」と名付けられた巨大な壁画のうち、「花咲く木」を対象としている。

「花咲く木」は、ケツアルコアトル神とされる「羽毛の生えたヘビ」の真下に13本、横に並んで描かれている。これまでの先行研究では、このうち2本の図像の読み方が明確になっており、筆者も同意している。しかし、残り11本の「花咲く木」の解釈には諸説あり、13本すべてを網羅する読み方がいまだ見つからないまま、研究が膠着状態である。

そこで、筆者は、これまでの先行研究にはなかった新しい視点を取り入れ、図像解釈を試みている。それは、先行研究で行われたような「花咲く木」を実在する植物の名前に当てはめていくものではなく、また、それを根拠にしたうえで図像を土地名、あるいは部族名であるとしたものなどとも大きく異なる。これらの方法では、何本かの「花咲く木」については論ずることは可能でも、13本すべてに当てはめられる読み方を導き出すことは最終的には難しい。修士論文で論じているのは、上記の方法を検証したのち、ヒトがテオティワカンをとりまく自然界をどのように認知していたか、またそれを図像にどのようにメタファーとして表現していたかという視点から、読み方を探ることである。

古代メソアメリカでは、森羅万象を彩る自然界の物質が神々として認知されている。神々は、ある時は火から生まれ、またある時は水から生まれ、風から生まれ、星から生まれ、植物からも生まれ出る。まさに八百万の神々が、生活空間に息づいていたのだ。あるものは暦となって時を動かす一端を担い、あるものは生活を支える神聖な資材や糧となり、当時のヒト社会において欠かせない意味を持つ存在になっていた。

筆者はこれまでの研究成果から、このような森羅万象から聖なる神々を見出す、いわば認知の仕方のようなものが壁画の描き方に表れているのでは、と考えている。研究を進める中で、壁画の図像には、当時古代メキシコで聖なる物質と考えられていた数多くの素材が登場し、その自然界での特性をとらえて描かれていることが、少しずつ明らかになってきたのだ。具体的には、まずテオティワカンから出土した遺物や他の住居址の壁画の図像も参考にしつつ、「花咲く木」に出現する図像と、実在の物質がもつ特徴とを比較した。その後、自然界に見られる現象のどの部分が暗喩されて図像に表現されているかを確認し、その物質に対する認知の仕方や意味づけを探った。後世のメキシコ中央高原で繁栄したアステカ時代まで神聖視され続ける物質については、ナワトル語による史料の中でどのように表現されているのかということも加味して考察を加えた。詳細は修士論文にゆずるとして、今は13本の「花咲く木」の研究結果をまとめている。

ところで、古代アメリカ学会会報第34号に「古代メソアメリカの花に会いに行く」を投稿して以降の筆者は現在、いまだ博士前期課程を履修中である。

大学の長期履修制度等を利用して研究をしているからで、理由は2児の子育てだ。これまで、助成金を得て幼い長女と2人で留学したり、のちに次女も含め母娘3人でメキシコ各地へ調査旅行に出向いたり、やりくりして研究生生活を送ってきた。しかし一方では、現地で長期滞在してじっくり調査したい、メキシコの大学で学生に混じってもっと学びたい、というジレンマと常に戦ってきた。

とはいうものの、現地へ出向かずとも、日本国内でできることはまだまだある。ひらがなを練習する次女の傍ら、ナワトル語の習得に奮闘したり、夕食後、作文の宿題を前にする長女に寄り添って、キッチンテーブルでスペイン語の論文を読んだり。本心はメキシコシティにあるUNAM大学まで飛んでいき図像学を受講したいのだが、こうして日本で今できる精いっぱいのことをするのも悪くはない、と最近では思えるようになってきた。

実際、嬉しいこともたくさんあった。次女の願いで、トウモロコシを庭で育てたことがある。トウモロコシといえば、古代メソアメリカを研究対象とする者としては、聖なる植物素材だ。神でもあるトウモロコシを、生贄を捧げることまではしなくとも慎重に播種し、幼い娘と生育を見守る。

やがて実が葉の間から見え隠れしはじめ、収穫を心待ちにしていたある日、異変に気が付いた。まだ小さいトウモロコシの実をめぐらして、アリが列をなしているのを発見したのだ。あわてて皮を剥いで何が起こったのかと確認してみると、そこには未成熟で半ば朽ちた粒が不規則に並び、アリは、この粒からしみ出る汁をめぐらして遠くからやってきていたのだとわかった。

この小さな現象に、筆者は喜びをおぼえた。古代メソアメリカの神話の中に、ケツアルコアトル神がアリの跡をたどることでトウモロコシ粒を手に入れたというくだりがあるからだ。中南米とはアリやトウモロコシの品種が異なるため一概には言えないが、日本の場合では甘いトウモロコシの粒からしみ出る汁があるのなら、アリは迷わずそこへまっしぐらに向かえるのだ。アリが誰に教わらずとも隠れたトウモロコシの在処を知っていて、導くことが出来るという自然界の不思議な常識や現象を、古代メソアメリカの人々も驚きをもって観察し、意味づけ、ゆえに神話に投影していたのかもしれない。そんなことにまで思いをはせてしまうような心躍る出来事だった。事実、自然現象にメタファーをかけて神

聖化する例は古代メソアメリカでは枚挙にいとまがない。天空を4つに区切って支えるワニの姿をしたセイバの木しかり、地下界である水中から顔を出して太陽に向かい咲きほこるスイレンの花しかりである。



ワニのような突起をもつセイバ ©丹羽悦子

実は、筆者の研究テーマでもある「花咲く木」にも、同じことが起きている。13本それぞれの図像に自然界の常識や現象を投影し、意味づけし、神聖化している箇所が見られるのだ。中には神となったものもある。それならば、これらの神々も、ナワトル語で「神々の集うところ」を意味するテオティワカンに集っていたのだろうか。そして、太陽と月が生まれた瞬間に立ち会っていたのだろうか。知りたいという思いが沸々と湧き上がり、どこまでも果てしなく思考が広がっていき、わくわくする瞬間である。

振り返ると、幼い子供らを抱えての研究生生活は、当初予定していた通りには進まず、うまくいかないこともあった。だが一方で、日常生活で研究に対する思わぬ発見や喜びをもたらしてくれることもあった。今は謝辞に娘たちの名前を入れるのを楽しみにしつつ、修士論文を仕上げている日々である。

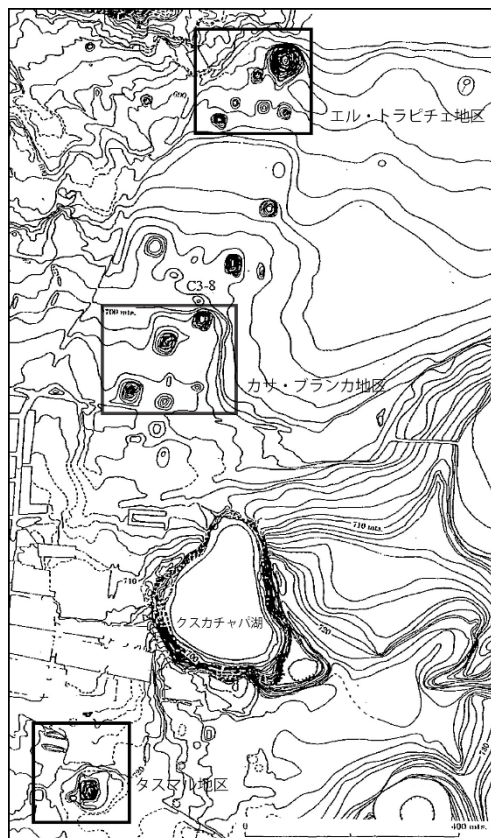
●チャルチュアパ遺跡における土器の変遷とマヤ南部地域の地域間交流

深谷岬（名古屋大学大学院文学研究科
博士前期課程1年）

2013年の春、私は初めて中米を訪れた。メキシコとグアテマラでは多くの博物館や遺跡を見て回った。また、エルサルバドルではチャルチュアパ遺跡の発掘調査に参加した。チャルチュアパ遺跡は、大小11の地区からなり、先古典期から後古典期における人類の活動の痕跡が認められる遺跡である。

また、時代を経るごとに都市域の中心は移動し、エル・トラピチェ地区、カサ・ブランカ地区、タスマル地区へと変遷する様子が観察できる。私はエル・トラピチェ地区の調査に参加した。様々な遺物が出土するのを目の当たりにし、自身もチャルチュアパ遺跡の研究に携わりたいと考えた。発掘調査中、多量に出土したこともあり、特に土器に興味を持った。

2014年の春に再びエルサルバドルを訪れ、エル・トラピチェ地区の測量調査と、卒業論文を作成するための予備調査を行った。測量にはトータルステーションを使用した。使用方法こそ知っていたが、使い慣れない機械に私は悪戦苦闘した。宿舎での練習の成果もあってか、数日後には機械を据えるのに数十分を要するようなことは無くなり、測量調査を無事に終えることができた。その一方で、ここ数年のエル・トラピチェ地区の発掘調査で出土した土器の実測も行った。



チャルチュアパ遺跡地図

チャルチュアパ遺跡の土器編年は、1978年にロバート・シャーラー氏によってつくられた。以後約40年経った現在でもその土器編年は年代決定のひとつの指標とされている。1996年以降には日本人調査団による発掘調査が進み、土器をはじめとする

様々な遺物を得られた。そしてそれらの新資料が用いられ、チャルチュアパ遺跡研究が進展し、遺跡の性格もより鮮明になっていった。しかし、チャルチュアパ遺跡の中でもエル・トラピチェ地区に関しては、シャーラー氏の発掘調査以降、土器の分析が行われていなかった。エル・トラピチェ地区は、チャルチュアパ遺跡の中で最も早く建造物の建築が始まった地区であり、この地区の土器は、遺跡の形成や発展の様子を明らかにするための重要な情報を持っていると考えられる。また、近年他の遺跡において、編年研究が進み、従来の土器編年に年代的な誤差があるという指摘がなされている。そのため、従来のチャルチュアパ遺跡の土器編年についても最新の研究成果と照らし合わせる必要がある。そこで卒業論文では、近年のエル・トラピチェ地区の発掘調査で出土した土器の分析を通して、チャルチュアパ遺跡の土器編年を再検討することを主な目的とした。

2014年の夏に、本格的な資料調査を始めた。主に土器の実測と写真撮影をして毎日を過ごした。基本的には宿舎で作業をしており、現場で作業員のおじさん達と会話をする機会があまりなかった。しかし、現地のスペイン語を聞く機会を逃すまいと、休憩中にはお手伝いさんや警備員さんにたどたどしく話しかけ、語学能力の向上も図った。スペイン語の習得は今後の大きな課題のひとつである。



© Proyecto Arqueológico El Salvador

帰国後、卒業論文の執筆にとりかかった。卒業論文では、日本考古学では主要な方法である型式学・層位学を用いて、先古典期の土器編年を新しく構築し、タイプバラエティ分類法を用いて作成された従

来の土器編年の検証を行った。その結果、従来の編年には再評価すべき点が多々ある一方で、新たに作成した土器編年と必ずしも一致しない部分があることも分かった。しかし、時間の制約もあって分析できた資料が限られたことや、タイプバラエティ分類法や層位学に関する知識が不足していたこともあり、量・質ともに納得できる分析ができたとは言えなかった。

今後は、まず卒業論文で残された課題を解決し、加えてマヤ南部の先古典期における地域間交流について、土器の分析から明らかにすることを研究目的とする。

まず一つ目の課題に関しては、卒業論文では新しい土器編年を構築し、タイプバラエティ分類法を用いてつくられた従来の土器編年の再検討を試みたものの、上述のように納得できる土器編年は完成しなかった。今後は、エル・トラピチュエ地区で出土した土器の分析を進めて分析資料を増やし、出土層位の解釈を慎重に行った上で土器編年の精緻化を図る。また、チャルチュアパ遺跡の他地区で出土した土器に関しても同様に分析を行い、通時的な土器編年を構築していく。そして、ゆくゆくは土器の変遷過程を詳細に観察することで、土器が製作、使用された当時の社会の復元を行いたいと考えている。

二つ目に挙げたマヤ地域の地域間交流については、初めて中米を訪れたときから興味を持ち続けているテーマである。様々な遺跡や博物館を訪れ、それぞれの遺跡から出土した遺物を見比べると類似点がかかなり多くあり、遺跡間に何らかの交流があったことは明白だった。そこで、卒業論文でも取り扱った土器を用いて、地域間交流の様相を明らかにする研究を行おうと考えた。地域はチャルチュアパ遺跡が位置するマヤ南部地域を、時期はマヤ地域で農耕定住村落が現れ、建造物の建築が始まる先古典期を対象とする予定である。まずは器形と装飾いずれの特徴もとらえやすい精製土器を中心に、チャルチュアパ遺跡とその周辺遺跡の土器分析を行い、斉一性や地域性を抽出する。そして、土器そのものまたは土器製作技術の移動などについて検討を行い、その背景にある地域間交流の様相を明らかにしたいと考えている。

●マヤ地域における黒曜石の原産地踏査

福井理恵（金沢大学大学院人間社会環境研究科
博士後期課程1年）

以前の「フィールド調査体験記」では、金沢大学がグアテマラのティカル遺跡で行っている考古学プロジェクトに関して報告した。今回は、その後、筆者と金沢大学国際文化資源学研究センターの中村誠一教授との共同研究として行ったマヤ地域の黒曜石原産地踏査について報告する。

この原産地踏査は、マヤ地域南東部に位置するラ・エントラダ地域（ホンジュラス）の各遺跡から出土した黒曜石を原産地推定するための前段階として行った調査である。原産地の原石サンプルと遺跡から出土した黒曜石製石器の特徴を比較することで原産地を推定していくため、まずは原産地の原石のデータを把握しておく必要がある。先行研究の中で各原産地の特徴に言及している場合もあるが、それらのサンプルの採取地点の詳細は明らかでないことが多い。従って、独自の原産地のデータを獲得するため、実際に踏査を行った。

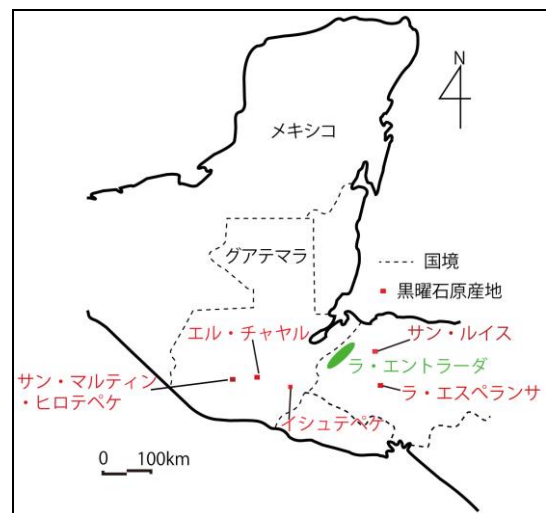


図1 踏査を行った黒曜石原産地

調査対象はグアテマラのエル・チャヤル、サン・マルティン・ヒロテペケ、イシュテペケの3ヶ所および、ホンジュラスのラ・エスペランサ、サン・ルイスの2ヶ所の計5ヶ所の黒曜石原産地である（図1）。筆者を含め日本人2人とグアテマラ人考古学者2人およびホンジュラスの研究所職員2人に各国で同行を依頼し、車でそれぞれの原産地に移動した。各原産地には複数の黒曜石産出地点があるため、今

回の踏査でも原産地内部における黒曜石の特徴の相違を考慮するべく複数の産出地点を巡ることとした。各調査地点はGPSで座標を記録した。

最初に向かったのは、グアテマラのエル・チャヤルである。エル・チャヤルはマヤ低地では特に古典期に最も多く利用されていたと言われる原産地である。今回の踏査の中では最も多い7地点を踏査した。バナナ農地のある丘の表層が石塊状の黒曜石で覆われている産出地（写真1）、また、古代マヤ人が残したと考えられている採掘坑のある産出地、近隣の町から2時間近く獣道のような山道を登っていくと現れる牧草地帯にある産出地と様々であるが、他の4ヶ所の原産地と比較して、最も各産出地点の黒曜石産出量が多いと考えられた。黒曜石自体の特徴として、産出地点ごとの違いが大きく、縞が入っている乳白色系の灰色のもの、漆黒のもの、黒系の灰色のものとして多様性があることが明らかであった。首都の外れから25kmほどということもあってか、比較的開発が進み、土地の所有者が変わり新しい家が建ち、古代マヤ人の利用していた黒曜石原産地としての様相が失われつつある産出地点の一面も確認することができた。



写真1 エル・チャヤルの黒曜石産出地（筆者撮影）

サン・マルティン・ヒロテペケは特に先古典期にマヤ低地の主流な黒曜石であった原産地と考えられている。サン・マルティン・ヒロテペケという町の周辺にある黒曜石原産地である。ここでは3地点を踏査した。黒曜石の産出地点は現代マヤ人の集落の周辺で、民族衣装を着た人々が行き交うところを人に道を聞きながら正確な地点を探していった。産出地点は小さな農地として使用されていた。黒曜石自体の特徴は漆黒で透明度は低めである。集落内の切通しでは黒曜石の堆積層もいくつか見られた。ま

た、多面体石核が多数確認できた。

イシュテペケはマヤ低地としては後古典期に利用が増加したと考えられている原産地だが、本研究の対象であるマヤ地域南東部では、地理的に近いということもあり、全時代を通して最も利用された黒曜石の原産地である。イシュテペケ火山の周辺に位置している（写真2）。ここでは5地点を踏査した。イシュテペケ火山の斜面に位置する産出地点では、急な山道を雨が降るなか登り、本調査で最も骨の折れる過程であった。一方、集落の中にある産出地点では、住民が大きな黒曜石の石塊を収集し、海外輸出しているという現代の黒曜石の資源としての利用の様子が見られた。石塊の中には直径7、80cmほどのものも多く、今回の調査の中で最も大きい黒曜石を産出する地点であった。黒曜石自体は褐色がかかった黒で透明度は高いものが主流だが、それらに紛れて、透明度はなく赤茶色の黒曜石も確認できた。



写真2 イシュテペケ火山（筆者撮影）

ラ・エスペランサはホンジュラスのラ・エスペランサ、インティブカ市の周辺の丘に位置する黒曜石原産地である。今回の調査では3地点を調査した。小学校の裏手にある丘はCerro de los Hoyosと呼ばれ、その名の通り地表面に黒曜石を採掘したと考えられる縦穴が大量に開いているのが特徴である。縦穴は深さ数メートルに及び底が確認できないほどで、落ちないように慎重に歩を進めていった。黒曜石の特徴としては、黒色、透明度は高いものが多い。

サン・ルイスはホンジュラスのサンタ・バルバラ県に位置するが、1992年に青山和夫氏らによって行われた踏査で発見された、新しい原産地である。ラ・エントラーダ地域の遺跡では、イシュテペケ産に次いで2番目に多く出土する黒曜石の原産地であるとされている。この原産地の詳細な黒曜石産出地

点は研究所職員でも把握している人が少なく、先行研究の文献と近隣住民への聞き込みを頼りに踏査を行った。その結果、2ヶ所で黒曜石を確認することができた。1ヶ所は集落付近の道路横に黒曜石を含む層がある露頭が見られ、もう1ヶ所は小川の河原石として黒曜石が見られた。確認できた黒曜石はどれも直径10cmにも満たない小石であった。黒曜石自体は、黒から灰色で透明度は低いものが多い。

今回の踏査では5ヶ所の黒曜石原産地を巡ったが、各原産地の異なる産出状況を把握し、それぞれの黒曜石の特徴が明らかになった。また、遺跡の調査では行かないようなグアテマラやホンジュラスの各地方を訪れたことで、現地地の自然や文化の一端に触れることができたことも有意義であった。マヤ地域およびその周辺部での黒曜石原産地は規模の小さい場所を含めるとかなりの数に及ぶ。今後も原産地の踏査を続け、黒曜石の原石データの拡充に努めていきたいと考えている。

●火山噴火前後における人間社会の変容—土器の変化と黒曜石製石器の変化—

八木宏明（愛媛大学大学院法文学研究科
修士課程1年）

以前、同会報に投稿させていただいたとき、筆者は、青年海外協力隊（以下、協力隊）の考古学隊員としてホンジュラスで活動をおこなっていた。本稿では、その後ホンジュラスを離れ、エルサルバドルでの活動を通して得たテーマと修士論文に関する展望、また最近参加した発掘調査についてごく簡単に紹介する。

先スペイン期に3度の火山噴火に覆われた盆地

筆者は、協力隊としてエルサルバドルで活動した際に、サポティタン盆地に位置するエル・カンビオ遺跡から出土した土器および同盆地のサン・アンドレス遺跡から出土した石器の分析をする機会を得た。サポティタン盆地はエルサルバドル中央に位置し、先スペイン期には3度の火山噴火（イロパンゴ火山（A.D.535年頃）、ロマ・カルデラ火山（A.D.660年頃）、ボケロン火山（A.D.1100年頃））に見舞われており、古代における火山噴火と人間社会の関係を知る上で非常に重要な地域と言える。過去にも数々の研究者によって調査がなされてきた。とくにペyson・シーツ氏らによる盆地全域におよぶ踏査

や、ロマ・カルデラ火山の火山灰に埋もれ、中米のポンペイとして名高いホヤ・デ・セレンにおける一連の調査は、火山噴火に見舞われた社会をより具体的に復元することを可能とした。

一方で、火山噴火に見舞われた社会が、どのように噴火に対応し、その後どのように変容したのかに関する研究は希薄である。さらに、近年の研究動向は、各火山の噴火年代を理科学的に明らかにする方向を向いており、考古学的側面から噴火のインパクトや人々の生活の変化を扱う研究はやや低調であるといえる。

—土器の分析—

このような研究動向の中、筆者は幸運にも、前述した3つの全ての火山灰層が面的に確認されているエル・カンビオ遺跡の土器の分析をおこなうことができた（写真1）。未だ分析中ではあるが、現時点で得られたいくつかの所見を簡単に述べる。

サポティタン盆地における土器研究は、シーツ氏らがおこなった調査の中ですでに型式分類がおこなわれている。筆者がおこなった分析は先学の研究を出発点として、既に設定されたタイプの出現期を層位的に確認していくところから始めた。その結果、先行研究では述べられていないことをいくつか知ることができた。

まず、同じセラミックグループ内に属するいくつかのバラエティーが、実際には時間的に前後して出現することが分かった。例えば、噴火前における2つの独立した単純な彩文方法が、噴火後に一つの土器に施されるようになるなど、文様の時間的な変遷が層位的な分析から明らかとなった。また、貯蔵用土器と考えられている土器が、噴火後に大型化することもわかってきている。

文様や形態など各種属性を分析することで、土器様式の広がり、地域性をより詳細に抽出することが可能となる。また、筆者は貯蔵用土器の変化が火山噴火に対する人々の対応だと思っているが、まだまだ資料に限りがあり、短絡的な感が否めない。さらなる貯蔵用土器や貯蔵穴の分析と合わせて民族事例を照合するなど、複合的に検討し結論を出したいと考えている。

土器の分析は現在進行中であり、今後の課題は多い。実際に現地へ赴き土器を丹念に観察し分析することで、詳細に土器の変化を明らかにし、自然災害とどのような関係があるのかを明らかにしたい。



写真1 土器分析の作業風景（筆者撮影）

一黒曜石製石器の研究一

次に、黒曜石製石器の研究に関して、現在筆者の展望を述べる。

黒曜石製石器に関しても、協力隊の時に分析する機会を得ることができた。サポティタン盆地に位置し、古典期後期のセンターであるサン・アンドレス遺跡から出土した約 2000 点の黒曜石製石器の分析をおこなった。この成果は、2013 年にエルサルバドルでおこなわれた第 5 回中米考古学大会にてその成果の一部を発表した。これまで同盆地でおこなわれてきた石器研究の多くが表採資料を使っていたのに対し、筆者は全て層位的に出土した石器を分析対象とした。分析の結果、石器の型式学的変遷を明らかにし、比較的近くに位置する他のセンター（チャルチュアパヤコパン）の石器と比較することで、同盆地における黒曜石製石器の特徴を明らかにした。石材の産地に関しては、肉眼分析によってその産地推定をおこなったが、さらに精度を高めるために蛍光 X 線分析をおこなう予定である。また、盆地内のセンターとその周辺に位置する集落から出土した石器の組成、製作技法、原産地を比較検討することで、盆地内における流通および火山噴火前後における石器の流通の変化についても考察したいと考えている。

フィールドワーク

上述してきたテーマを持ち、フィールドワークで一次資料を得るために発掘調査にも参加している。2015 年 2 月には市川彰氏が指揮するサン・アンドレス遺跡における発掘調査 PASACS(Proyecto

Arqueológico San Andrés y Cara Susia)【日本学術振興会科研費新学術領域研究(課題番号 26101003)、代表：青山和夫、研究分担者：市川彰】に参加した(写真2)。このプロジェクトの大きな目的は、メソアメリカ周縁社会の盛衰過程を、周縁の独自性と火山噴火の影響に着目し、明らかにすることである。この目的は筆者が修士論文で扱いたいテーマと大きく重なり、筆者にとって非常に有意義な調査といえる。

調査では、良好な状態の火山灰層をいくつか確認することができ、次の調査の課題も確認することができた。遺物の分析は現在進行中であるが、修士論文で扱うテーマを常に意識し、この調査に関わっていきたい。

以上、筆者が現在関心を持っている研究テーマと、現在参加しているフィールドワークについて簡単ではあるが紹介してきた。火山噴火という自然災害を一つの視点として、詳細な遺物の分析および、発掘調査で得られた知見をもとに、修士論文を執筆したい。また、2015 年に参加した発掘調査ではサン・アンドレスという遺跡の重要性を感じたため、博士課程では自分で研究資金を獲得し、新たな目的を設定し発掘調査を実施したいと考えている。



写真2 PASACS 発掘調査の様子 ©PASACS

第5回東日本部会研究懇談会

『考古学における祭祀・儀礼研究の現在』

第5回東日本部会研究懇談会は、平成27年6月13日（土）、東京大学総合研究博物館にて開催された。梅雨時とあって天候が心配されたが、快晴となり会員21名、非会員7名の参加があった。今回はメソアメリカのマヤとアンデスのワリを対象に研究する2名の研究者を迎え、「考古学における祭祀・儀礼研究の現在」と題し報告いただいた。

塚本憲一郎会員（日本学術振興会特別研究員SPD/青山学院大学）の「広場の政治性—古代マヤ都市エル・パルマルを事例として—」は、古代マヤ都市の考古学調査においてあまり重要視されてこなかった広場に着眼し、広場で行われた劇場型儀礼とその政治性を中心にした分析から、異なる社会成員間の権力とイデオロギーのせめぎあいの様子を考察したものであった。土井正樹会員（日本学術振興会特別研究員PD/山形大学人文学部客員研究員）の「祭祀建築の儀礼的放棄：ペルー中央高地南部ワンカ・ハサ遺跡の事例」は、ワリ国家初期にあたる小規模集落遺跡で発見されたD字型建築の儀礼的放棄のコンテクストと出土品の土器に注目し、D字型建築の機能を考察したものであった。

コメンテーターとして、前者には関雄二会員（国立民族学博物館教授）をお招きし、理論的側面だけでなく方法論に関するコメントもいただいた。後者には松本剛会員（南イリノイ大学考古学調査センター・ポスドク研究員）と、若林大我会員（法政大学他 非常勤講師）の2人をお招きした。松本会員からは方法論を中心に、若林会員からは民族学資料に基づいたコメントをそれぞれいただいた。また会場からの質問とコメントも多く、予定時刻を超えても活発な議論が続いた。

発表内容は両者とも博士論文に基づいているが、これまで詳しく扱わなかった新たな議論にも触れていただいた。詳細については学会ウェブページに掲載されている抄録を参照いただきたい。

東西部会による研究懇談会は開始から4年目を迎え、もはや学会行事として定着しつつある。本年度は新役員体制になり部会幹事も交代したため、これまでの研究懇談会の運営方針を踏襲しつつ、新たな色味も加えるべく試行錯誤した。

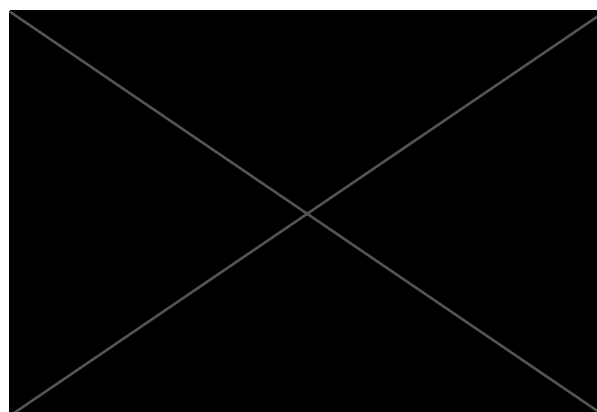
まず、6月開催ということで、在外会員の帰国を狙い、コメンテーターとしてお招きした。研究大会・総会は12月にあたり、在外会員の多くが参加困難との指摘もあるが、初夏の研究懇談会は一時期帰国する会員の参加が比較的容易である。そのため、これからもこの機会を生かし、広く会員に参加を呼びかけていきたい。一時期帰国ではないものの、発表者の塚本氏は長年、メキシコと米国で研究を続け、今春より十数年ぶりに日本に居を移し、新たな研究生活を開始されたばかりの研究者である。メキシコでの長年にわたる調査と米国で磨き上げられた塚本氏の研究成果を聴くことは、今回の目玉のひとつであった。

また近年の研究者動向として、東北や北海道、北陸といった地方の研究拠点が充実しつつある。今回は本会事務局がある山形大学の土井会員を東日本部会へお招きした。研究懇談会では、今後も国内各地の若手会員を中心に、国外在住の会員にも積極的な参加を願いたい。

今回の新たな試みとしては、考古学畑の多い本学会員の中では少数である、現代社会を研究対象とする人類学者をコメンテーターとして迎えたことである。現代の先住民族事例を背景にしたコメントは、考古学的方法論や解釈の議論を一度俯瞰視することにつながり、議論に膨らみを与えられ、大いに刺激になった。今後の研究懇談会でも、考古学領域にこだわらないテーマ設定を検討していきたい。

最後に、会場をご提供いただいた鶴見会員ならびに、お手伝いいただいた学生会員の皆さん、そして発表者とコメンテーターの皆さんにこの場を借りて謝意を示したい。

（東日本部会幹事：福原弘識）



●公開フォーラム

「古代文明の生成過程－エジプトとアンデス」

関雄二（国立民族学博物館）



（写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト）

2015年1月25日（日）、JPタワー&カンファレンスホール1（東京）にて、公開フォーラム『古代文明の生成過程－エジプトとアンデス』を開催した。古代アメリカ学会の協力のもと、国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(研究代表者：関雄二)が主催した企画である。東京駅前という好立地もあり、181人の参加を得て、会場はほぼ満員となった。

本フォーラムは、報告者が現在進める研究テーマである権力形成、とくにその経済的側面に焦点を絞り、世界の古代文明間の比較を行うという趣旨の下で開かれた。一昨年のマヤ文明、昨年の西アジア文明に続き、今回はエジプト文明を対象とした。はじめに報告者より開催の趣旨が述べられ、次に近畿大学の高宮いずみ氏と早稲田大学の河合望氏によるエジプトの発表があり、これを受けて報告者と埼玉大学の井口欣也氏によるアンデスの発表が続いた。最後に報告者の司会の下、パネリストによる討論が行われた。

高宮いずみ氏は「経済から見た古代エジプト初期国家の形成」のタイトルで、巨大なピラミッドが築かれた古王国時代以前の先王朝時代と初期王朝時代の社会を扱った。先王朝時代については、西アジアからの伝播と思われる農業・牧畜を主体とする自給

自給的経済からの発展過程を紹介し、ものづくり、交易、埋葬の様相を語った。また初期王朝時代を、統一国家が出現し広域の再分配経済が始動した時期ととらえ、宮廷と官僚組織、文字の使用、徴税システム、王領地、工芸品生産、交易と採掘、埋葬などの観点から複雑社会が出現した時代であったことを示した。

次に河合望氏は、大型のピラミッドの建設が隆盛を極めた古王国時代の経済についてまとめた。とくにピラミッド建設は奴隷労働によるものではなく、農民の徴用であった。そのため建設労働者のための食料の確保が必要となり、これがひいては農業生産高の増大や行政組織の発展、徴税の発達、外国人労働者の徴用などをもたらしたと述べ、アンデスの神殿更新説にも通じる側面を提示した。さらに第4王朝スネフェル王下で、ピラミッドおよびそれに付属する葬祭殿の建設や維持のために王領を設けるなどを指摘し、これまたアンデスのインカ帝国の統治システムを想起させる内容であった。

アンデス研究者側は、まず報告者が、農耕定住とほぼ同時に出現する神殿の発生メカニズムについて、従来日本調査団が提唱してきた神殿更新説を発展させたモデルを示した。従来の神殿更新説は、神殿の建設や更新こそ労働力の統率、食糧増産、社会の複雑化をもたらしたという画期的な文明論を提示した点で高く評価できるものの、なぜ神殿が更新され続けたのかという点については全く語っていない。ここに社会科学で注目される実践論や社会構造化論を接合させることで、更新活動で生じる破壊と廃棄自体にも儀礼性を求め、できあがった神殿で執り行う儀礼だけが宗教性を持つのではないことを主張した。

井口欣也氏は、日本調査団が長年発掘を行ってきたクントゥル・ワシ遺跡をとりあげる。そこでは、形成期後期前葉に洗練を極めた大神殿が成立し、祭祀儀礼が発達するとともに使用する儀礼用具の生産が強化され、社会の複雑化は進んだ。また広域にわたる貴重な資源・加工品流通のネットワークも成立した。しかし形成期後期後葉には、神殿の建設・改修活動が活発化するが、土器やその他の工芸品の原材料は神殿周辺で採取可能なものに限定されるようになり、遠隔地の貴重な資源の流通ネットワークについても一部は維持されたものの、内容は限定的かつ重点的になったと指摘する。こうした詳細な社会

変化を追究することができる事例は少なく、クントゥル・ワシ遺跡からの考古学情報は貴重である。

パネリストらによる討論では、会場からの質問を交えながら活発に意見が交わされ、予定時間を過ぎても会場から質問や意見が出され、盛況のうちに終了した。

●国際シンポジウム

「La producción de los espacios rituales en las regiones de la zona sur de los Andes」

（南アンデスの儀礼空間の生成）

松本雄一（山形大学）



（写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト）

2015年2月11日(水)、東京工業大学キャンパス・イノベーションセンターにおいて、「La producción de los espacios rituales en las regiones de la zona sur de los Andes」(南アンデスの儀礼空間の生成)が開催された。本シンポジウムの主催は、山形大学 人文学部 新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03「アンデス比較文明論」(研究代表者：坂井正人)、共催は国立民族学博物館 科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(研究代表者：関雄二)、協力は古代アメリカ学会であった。

今回のシンポジウムでは、古代アンデス文明の儀礼空間がテーマとなった。近年の考古学において儀礼空間は、その空間におけるに実践によって多様なアイデンティティと権力が生成される動的な場として注目されている。本シンポジウムにおいては、こうした近年の動向を踏まえつつもより実証的なアプローチを目指し、儀礼空間の具体的な生成過程に焦

点が当てられた。

南アンデスは先スペイン期を通じて多様な社会と儀礼空間が展開した地域であり、本シンポジウムの発表者はそのいずれもが儀礼空間の調査を行い最新の考古学データを有している。これに対し、出席した日本人研究者はペルー北部における調査経験を有しており、長年にわたって北部山地で蓄積されてきた日本調査団のデータを用いてアンデス北部と南部の比較が試みられた。これまで対話が少なかった研究者の組み合わせであったが、数多くの共通の問題意識が確認された貴重な機会となった。使用言語はスペイン語であるにもかかわらず計 10 名が参加した。

坂井正人（山形大学）と関雄二（国立民族学博物館）による趣旨説明の後、5人の研究者が発表を行った。発表者は、発表順にアレクセイ・ヴラニッチ（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）とアンドリュー・ロディック（マクマスター大学）、ジョン・ジャヌセック（ヴァンダービルト大学）、坂井正人（山形大学）、松本雄一（山形大学）であり、関雄二（国立民族学博物館）が総合司会を担当した。

最初にアレクセイ・ヴラニッチが、「法医学的 (forensic)」考古学というアプローチを提示し、ティワナク遺跡におけるこれまでの復元の問題点を指摘した。数多くの恣意的な復元の誤りを取り除いた結果、ティワナク遺跡における儀礼空間が確立した時期が形成期にさかのぼるという説が提示された。アンドリュー・ロディックは、タラコ考古学プロジェクトが長年にわたって蓄積したデータの中から、建築内での饗宴の痕跡に焦点を当て、儀礼化のプロセスにおける社会的記憶の生成を儀礼空間の変容と関連付けて論じた。続くジョン・ジャヌセックはコンコ・ワンカネ遺跡における最新の調査成果より、従来ティワナクの二次センターとして扱われることが多かった同遺跡が実際には形成期後期に対応する複数の共同体からなる政体の一つであったと論じた。さらに、このような儀礼のあり方を共有する政体間の相互作用がティワナク遺跡における都市化を生んだという視点が提示された。坂井正人は 2009 年から 2014 年に行われたナスカの地上絵における調査データをもとに、儀礼空間としての地上絵の通時的変化を論じ、形成期における地上絵の分布が当時の社会組織を反映している可能性を指摘した。最後に発表した松本雄一は、高地のカンパナユック・ルミにおける最新の調査成果を提示し、居住域とされる場

所における儀礼空間が神殿の出現と連動しており、双方で行われた儀礼行為が互に関連付けられていたと論じた。それぞれの発表後には、質疑応答の時間が設けられ、方法論、解釈の枠組み、さらには時期同定の妥当性に至るまでの幅広いテーマで活発な討論が繰り広げられた。

●国際シンポジウム

「Transformaciones y continuidades sociales en la formación del Estado Primario」

(初期国家形成における社会の変容と継続性)

佐藤吉文 (国立民族学博物館外来研究員)

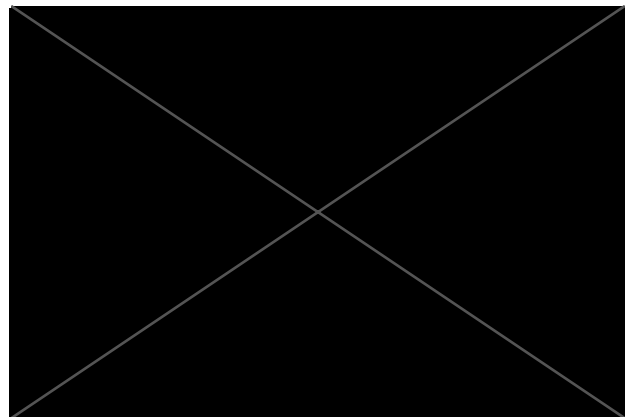
本シンポジウムは、国立民族学博物館ならびに文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(研究代表者：関雄二) 主催のもと、山形大学人文学部、新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03「アンデス比較文明論」(研究代表者：坂井正人) を共催にむかえ、古代アメリカ学会の協力をえて 2015 年 2 月 14 日 (土) に国立民族学博物館第 6 セミナー室において開催された。使用言語はスペイン語であったが、18 人が参加した。

本シンポジウムにおいて取り上げられたティワナクは、紀元後 500~1150 年頃にティティカカ湖南岸に栄えた大遺跡である。1980 年代半ばよりすすめられた長期にわたる学際的調査と活発な議論・研究によって、研究者のなかには、この遺跡を、ペルー北海岸のモチェや中央高地のワリと並んで、古代アンデス文明において自立的に国家段階の政治機構を発達させるに至った初期国家の中心、つまり首都として認識するものもある。

ティワナク国家の成立過程を北海岸のモチェと比較すると、ひとつの問題系が浮かび上がる。それが社会の断絶性と連続性である。モチェ国家の中心となったペルー北海岸では、国家社会成立のはるか以前に、祭祀センターを中心として繁栄した形成期社会が一旦崩壊するため、形成期社会と国家社会のあいだにはある種の断絶がある。それに対し、ティワナク国家に先行する形成期社会 (前 1500-後 500 年) は北海岸のように崩壊することなく、国家はあたかも形成期社会の持続的帰結のように成立する。では、ティワナク国家の成立とは、形成期社会の一亜種にすぎず、両者のあいだには大きな変容はなかったのか。それとも、両者のあいだにはたしかに変容

が生じたのか。変容があったとすればどのような側面に認められ、それは成立後の国家社会をどのように支えたのか。このような問題を問うことが、古代アンデス文明における国家社会の成立要因とその多様性を理解することにつながる。

本シンポジウムでは、ティワナク遺跡の発掘調査に長年たずさわりの、現在では形成期の最重要遺跡のひとつであるコンコ・ワンカネ遺跡の発掘調査でも指揮を執るジョン・ジャヌセック (ヴァンダービルト大学)、ティワナク遺跡の形成過程を大型建造物に使用されている石材の丹念な分析から論じてきたアレクセイ・ヴラニッチ (カルファオルニア大学ロサンゼルス校コッツェン考古学研究所)、土器の詳細な属性分析にもとづいて形成期の土器製作伝統をめぐる社会関係を検討してきたアンドリュー・ロディック (マクマスター大学)、ティワナク国家の地方拠点であり、形成期の祭祀遺跡でもあるパレルモ遺跡の発掘調査をおこなった佐藤吉文 (国立民族学博物館外来研究員) の 4 名が、ティティカカ湖盆地における形成期社会の特徴とティワナク国家の成立における変容と連続性について論じるとともに、ワリの地方センターのひとつであるエル・パラシオ遺跡の発掘調査をおこなっている渡部森哉 (南山大学) が、ワリとティワナクをインカ帝国にいたる古代アンデス文明の形成過程のなかに位置づける視点を提示した。総合司会は関雄二 (国立民族学博物館)、コメンテーターは松本雄一 (山形大学) がつとめた。個別の発表後には質疑応答の時間が設けられるとともに、最後に、ティワナクの性格をめぐる活発な討論が行われた。



(写真提供：科学研究費補助金基盤研究 (S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト)

●公開フォーラム

世界文化遺産「ナスカの地上絵」の研究と保護をめぐる国際協力

中川渚（総合研究大学院大学）

2015年3月19日（木）、国立民族学博物館第4セミナー室にて、公開フォーラム『世界文化遺産「ナスカの地上絵」の研究と保護をめぐる国際協力』が開催された。主催は国立民族学博物館 科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関雄二）、および山形大学人文学部 新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03「アンデス比較文明論」（研究代表者：坂井正人）、そして古代アメリカ学会および文化遺産国際協力コンソーシアムの協力のもと、国際交流基金の助成を受けたものであった。連日続く雨の中ではあったが、31人が会場に足を運んだ。

本フォーラムは、ユネスコの世界遺産のうち最も有名なもののひとつであり、また最近破壊や保存に関してメディアにも取り上げられることの多い、ナスカの地上絵の研究と保護に関するものであった。はじめに国立民族学博物館の関雄二氏より開催の趣旨が述べられ、次に山形大学の坂井正人氏、ペルー国立ビジャレアル大学のミゲル・パソス氏による講演があり、最後に関雄二氏の司会のもと質疑応答が行われた。

坂井正人氏は「世界遺産ナスカの地上絵に関する学術研究と保護活動」のタイトルで、ナスカの地上絵の発見と研究の歴史を詳しく紹介し、その後、現在山形大学によって行われている研究と保護について述べた。山形大学は2004年からナスカの調査を行っており、衛星写真と踏査から多くの新しい地上絵を発見している。講演では、地上絵は地上から全体像が見えにくいため破壊が進みやすく、まずは測量をして図化することで、どこに何があるかという情報を広く共有することが、地上絵の保護に重要であることが示された。また、山形大学による遺物を含めた分析から、地上絵の描かれた時期やそれに関連する儀礼についての興味深い成果が提示された。

次に、ナスカを含むイカ県の文化財保護に長年わたって携わってきたミゲル・パソス氏が、「ナスカの学術調査と文化遺産保護」のタイトルのもと、ペルーの政治的背景や文化財保護機関の設置の歴史、そして自身の経験を絡めながら、地上絵の保存の歴

史を年代順に丁寧に講じた。この中で、何度か旧文化庁やユネスコなどによる保護計画が作成されながらも、資金不足などの問題によりほとんど実行されずに破棄されてきたことも示された。実現に至るまでに多くの課題があるのだろうが、少なくともこういった数度にわたる計画策定から保護意識が一層高められてきたように感じた。しかし、近年鉱山開発や宅地造成によって急速に地上絵の破壊が進んでおり、早急に対策をとる必要に迫られている。2013年より新しく運営計画が練り上げられているとのことで、この計画の実現を期待したい。

質疑応答では、司会の関雄二氏よりいくつか質問がされたほか、予定時間を過ぎて会場から質問や意見が出され、盛況のうちに終了した。



（写真提供：科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト）

●公開講演会

「地上絵とミイラ：ナスカにおける学術調査と遺跡保護」

土井正樹（日本学術振興会特別研究員 PD、山形大学）

2015年3月22日に山形大学において公開講演会「地上絵とミイラ：ナスカにおける学術調査と遺跡保護」が開催された。本講演会は国際的な文化財の調査と保護に関わる複数の機関の協力により開催されたものであり、主催は山形大学人文学部・新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03「アンデス比較文明論」（研究代表者：坂井正人）、共催は国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関雄二）、協力は古代アメリカ学会と文化遺産国際協力コンソーシアム、助成は国際交流基金であった。また、地方都市での開催で

あり、内容もやや専門的であったにもかかわらず、当日は、74名の一般市民の参加があった。

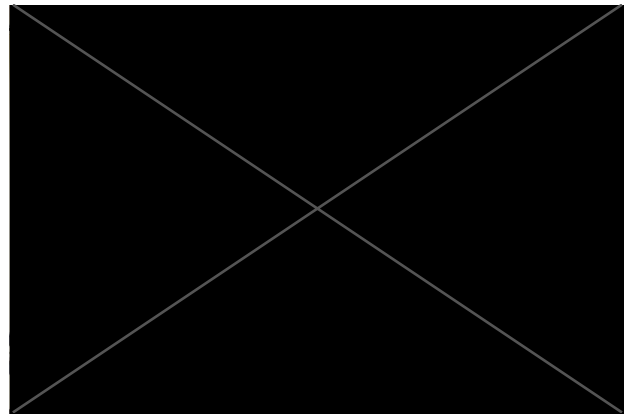
講演会ではまず、山形大学人文学部学部長であり、山形大学人文学部附属ナスカ研究所長を務める北川忠明氏、続いて国立民族学博物館の関雄二氏による挨拶があり、その後、3名の研究者による発表が行われた。最初に、「世界遺産ナスカの地上絵に関する学術研究と保護活動」というタイトルで、山形大学の坂井正人氏による発表が行われた。坂井氏の発表では、地上絵の保護活動と学術研究は一体化したものであり、保護活動のためには、まず、どこにどのような地上絵が存在するのかを明らかにする必要があることが述べられた。発表の終盤では、居住地の拡大により地上絵が消失している様子が衛星写真によって示され、遺跡破壊の深刻さと保護活動の重要性を認識させられた。

次に、長年ナスカの地上絵の保護活動に取り組んできた、ペルー国立ビジャレアル大学のミゲル・パソス氏により「ナスカの学術調査と文化遺産保護」というタイトルでの発表が行われた。パソス氏の発表はスペイン語で行われ、坂井正人氏が通訳を務めた。パソス氏の発表は、地上絵の保護活動の歴史に関するものであったが、とくに印象に残ったのは、ナスカ地域での故マリア・ライヘ氏の影響力の大きさである。役人であれ研究者であれ、ナスカ地域で調査や保護活動を行う場合にはまずライヘ氏に挨拶に行く必要がある、挨拶しなかったためにライヘ氏に訴えられ逮捕された研究者も存在するということがあった。このような慣例自体には是非があるが、

このような慣例が地上絵の保護につながっていた側面も否めないであろう。

最後に瀧上舞氏（山形大学/日本学術振興会特別研究員）から「ミイラから見る先史アンデス文明の食性」というテーマで発表があった。中心となったのは、瀧上氏が行ったミイラの毛髪による食性推定であり、とくに、毛髪を用いた分析の利点が強調されていた。内容には食性解明のための理化学的分析についての説明が含まれていたが、専門用語を極力排し、図や写真を多用した説明であったので一般の人々にとっても理解しやすい内容であった。

若干早めに発表が終了したため、急遽質疑応答の時間が設けられた。突然の予定変更にもかかわらず、参加者からは発表者に対し活発に質問が寄せられていた。その様子からは、この公開講演会が、研究成果を一般市民へ還元する場であるだけでなく、研究への一般市民の関心を喚起する貴重な機会にもなっていることを感じ取ることができた。



(写真提供：山形大学人文学部)

事務局からのお知らせ

1. 第20回研究大会・総会の開催について

昨年の総会および『古代アメリカ学会会報』第37号でもお知らせしましたように、古代アメリカ学会第20回研究大会・総会を2015年12月5日(土)と6日(日)の2日間にわたって東京大学本郷キャンパスの理学部2号館4階講堂において開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

研究大会における研究の発表は審査対象となります。発表を申請される会員は、研究大会実行委員長による後述の「2.第20回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について」をご参照の上、申請していただきますようお願いいたします。なお

今回より研究大会に分科会枠を導入しますのであわせてご活用下さい。

なお、研究大会・総会のご出欠については、すでに事務局より発送した郵便物に同封されておりますハガキにてご返信をお願いします(2015年10月1日(木)消印有効)。また、12月5日の総会終了後に懇親会を企画しておりますので、あわせてご出欠についてお知らせ下さい。

総会にご欠席の方は、同ハガキによる委任状へのご署名にご協力をお願いいたします。

記

古代アメリカ学会第20回研究大会・総会

1. 日時：一日目 2015年12月5日(土)
研究会 13:00～17:00(予定)
総会 17:00～18:00(予定)
懇親会 18:30～(予定)
二日目 2015年12月6日(日)
研究会 09:00～12:00(予定)
(発表本数が多い場合は、午後の部もおこないます)
2. 場所・会場：東京大学本郷キャンパス・理学部
2号館4階講堂(文京区本郷7-3-1)

2. 第20回研究会における研究発表等の申請方法と審査について

古代アメリカ学会第20回研究会実行委員長 鶴見英成

会員より申請があった研究発表等については、研究会実行委員会が審査をおこなったうえで発表承諾の可否について通知いたします。

発表を申請される会員は、以下の要領にしたがって申請をして下さい。

記

以下の事項を記入し、PDFファイル(またはワードファイル)にて事務局に添付ファイルでお送り下さい。なお、返送用ハガキの「発表申請」の「有」をマルで囲んでご返送下さい。

1. 発表申請者(会員に限ります)
2. 発表申請者住所・e-mail(発表申請者に対して審査結果をメールで通知します)
3. 発表カテゴリー(研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれか)
4. 発表タイトル
5. 発表著者(共同発表の場合、研究会抄録、プログラム等に記載する順番通りに記入してください)
6. 口頭発表者(実際に口頭発表をおこなう者。会員に限ります)
7. 発表要旨(研究発表：1200字程度、調査速報：800字程度、ポスターセッション：800字程度。要旨とは別に1-2枚の図版等を添付することも可としますが、その場合も要旨のテキストと同じファイルの中に組み込み、一つのファイルにして送付してください) A4判にて、1ページ40字×40行、横書き、余白は上35mm、下・左・右30mm、文字は10.5

ポイントで作成してください。

(*発表時間は、質疑応答を含め調査速報20分、研究発表30分を予定しています。ポスターセッションはA0で2枚以内によるものとします)

*送付先：jssaa@sa.rwx.jp(学会事務局)

*締切：2015年10月1日(木)午前10時
(メール必着)

古代アメリカ学会では、会員が共有する関心テーマについて集中的に議論できる場を提供するため、第20回研究会より分科会枠を導入します。分科会は、特定の研究テーマに即して、代表者を含めて3-5名のグループで発表・討論する場です。分科会に割り当てる時間は、口頭発表者数×20分を予定しています。この時間をどのように使うかは、分科会ごとに判断してください。口頭発表の時間を削ってコメンテーターを導入したり、討論の時間を増やすことも可能です。なお分科会は、通常の研究発表・調査速報と同じ会場で開催され、発表時間が重なることはありません。ただし口頭発表できる機会は、研究発表・調査速報・分科会発表をあわせて一人1回です。分科会はコメンテーターを指名することができますが、それは口頭発表として数えません。分科会を組織する方は、分科会のタイトル、発表者(変更不可)、趣旨説明(1200字程度)、全発表者の要旨(各800字程度)を取りまとめて、代表者として申請してください。送付先・締切は他の発表と同じです(上記をご覧ください)。なお分科会代表者・発表者は、返送用ハガキの「発表申請」の「有」をマルで囲んでご返送下さい。

審査結果については、10月15日(木)頃までに、申請者にメールで通知いたします。この通知と同時に、発表承諾者にたいしては、抄録要旨の原稿依頼・執筆要領などもお知らせしますので、決められた期日までにご提出をお願いします。

なお、審査基準については、以下の「参考」をご参照下さい。とくに、単独発表か共同発表か、また著者の記載順をどうするかなどについては、あらかじめよくご調整のうえ申請をなさるようお願いいたします。

*参考 「古代アメリカ学会研究会運営に関する申し合わせ(平成23年12月2日役員会決定)」より抜粋

・発表についての審査は、以下の原則に照らして判断することとする。

(内容)

(1)研究大会でおこなわれる発表は、現在の一般的な研究状況において一定の水準に達していなければならない。

(2)発表の内容が、他の研究者の著作権やデータに関する権利を侵害してはならない。

(形式)

(1) (口頭発表をおこなうことができる者)

口頭発表者(実際に口頭で発表をおこなう者)は会員でなければならない。ただし実行委員会が企画した招待講演・発表等についてはこの限りではない。

また、口頭発表者は、会員であれば第 2 発表者以下でも差し支えない。

(2) (発表者および共同発表者の記載順)

発表者名(単独発表か共同発表か、共同発表の場合発表者記載順など)は、データに関する権利等の観点から適切でなければならない。このため、口頭発表者が会員であれば、非会員は第 2 発表者以下の共同発表者となることができる。

(3) (複数の口頭発表についての制限)

1 回の研究大会において会員が口頭発表をおこなう機会は一人 1 回とする。ただし、複数の共同発表者(記載順を問わない)となることができる。

以上

3. 原稿募集

①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第 18 号(2015 年 12 月刊行予定)に掲載する原稿を募集しています。執筆細目が改定されましたので、投稿希望者は、必ず会誌第 17 号に掲載されている、最新の寄稿規定・執筆細目をよくお読みの上、投稿をお願いします。

「論文」のほか「調査研究速報」にも奮ってご投稿ください。「調査研究速報」では、発掘などフィールドワークの成果はもちろんのこと、文献調査やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。「論文」・「調査速報」・「書評」のいずれも随時募集しています。「論文」は査読(通常、原稿受領後 1~2 か月で査読終了予定)を終えたものから随時掲載が決まります。「調査研究速報」

は 9 月 25 日までに届いたものを第 18 号の査読対象とします。

いずれの場合も、投稿希望者は下記編集委員宛てに事前にご連絡願います。投稿カードを配布しますので、これを提出原稿に添付してください。

お問い合わせ先:

大平秀一(運営委員、会誌編集担当)

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1

東海大学文学部アメリカ文明学科

Tel.

Fax.

E-mail:

②会報「39 号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、特に若い会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力お願いいたします。

◎内容

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。

会誌『古代アメリカ』には投稿しないような簡易の情報も可。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員にとって有益な学術情報。

◎形式

○原稿字数は、写真・図版を含めて 4000 字(会報 2 ページ分)以内とします。

○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

◎掲載

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をすることがあります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

◎投稿先・締切

○運営委員（会報）福原弘識宛に、添付ファイルの形でメールにて送信してください。

送付先アドレス 
(会誌とは異なるのでご注意ください)

○投稿締切 11月15日（日）

○発行予定 1月上旬

4. 会費納入のお願い

会費が未納となっている方は、先にお送りいたしました振込用紙を使用してお振込みいただくか、または以下の口座に直接お振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお2年度分以上、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行 口座番号：00180-1-358812
加入者名：古代アメリカ学会
みずほ銀行山形支店
口座番号：1211948(普)
口座名義：古代アメリカ学会

5. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを1冊2,000円（会員価格）で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ学会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第3号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

（事務局からのお願い）

現在、古代アメリカ学会では、学会とかかわる諸情報の連絡、および周知にメールを多用しております。まだ学会にメールアドレスを登録されていない方や、学会からメール連絡が届いていないという方がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いします。特にGmailなどのフリーメールをご利用の方は、事務局からのメールが迷惑メールとして処理されないよう、学会事務局アドレスを登録するか、迷惑メール対象から解除する手続きを行ってください。

<編集後記>


今号の特集『フィールド調査体験記の「その後」』は、以前よりあたためていた企画で、2年経ってちょうど頃合いもよく形にすることができました。すべての方が、悩みながらも明るい希望を持って研究を進めていることが感じられるような、力強い文章を書いてくださいました。執筆いただいた会員の方々に心よりお礼申し上げます。

今後も会報が、若手の研究者の方々の成長に少しでも貢献できるような場となるよう、微力ながら力を尽くしていきたいと思っております。 (中川)

2年前の特集時に研究者の卵だった皆さんの成長はいかがだったでしょうか。卵の殻から出て、これから大きく羽ばたいていこうとする彼らの研究が垣間見れたのではないのでしょうか。会報原稿は随時募集しておりますので、紙面の更なる充実にこれからもご協力お願いいたします。

(福原)

発行 古代アメリカ学会
発行日 2015年7月1日
編集 古代アメリカ学会 会報担当：福原 弘識
中川 渚

古代アメリカ学会事務局
〒990-8560
山形県山形市小白川町1-4-12
山形大学人文学部 
E-mail : jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座 : 00180-1-358812
ホームページ URL : http://jssaa.rwx.jp/